2Ea-4　　男子学生の背広スタイルの着用態度と性格特性との関連

○盛田真千子* 高岡朋子** 矢尻世津子*3 小林茂雄*4
（*文化女子大、**北海道女子短大、*3昭和女子短大、*4共立女子大）

目的　背広は外出着やｻﾗﾘｰﾏﾝの通勤着として根強く定着しているが、なかでも伝統的な背広ﾈｸﾀｲｽﾀｲﾙを抵抗なく受け入れている者は、会社の体制や職場の人間関係を重んじる傾向にあることが、前回の調査結果から判明した（「男性の通勤ｽﾀｲﾙと仕事に対する態度との関連」繊維機会学会論文集Vol.48 No.4 ）。そこで、今回は近い将来、背広を着るであろう男子学生を対象に、背広ｽﾀｲﾙのｲﾒｰｼﾞとその着用態度、そして性格特性や学生の専攻によっても服装観が異なるのではないかと考え、若年男性の服装観などを探った。

方法　調査は1995年5-10月に、留置法の質問紙調査法によって行った。調査対象者は北海道、富山と首都圏の男子学生(18-19才 180名、20才以上 127名)307名である。調査内容は、背広ｽﾀｲﾙのｲﾒｰｼﾞ（19項目、 5段階尺度）、背広の着用態度（16項目、 4段階尺度）、性格特性（30項目、 3段階尺度）であり、基本属性なども記入してもらった。解析方法は背広ｽﾀｲﾙのｲﾒｰｼﾞと背広の着用態度については因子分析を行い、各因子に強く反応した2ｸﾞﾙｰﾌﾟ（因子得点＋１以上、－１以下）について、平均値の差の検定によって性格特性の違いを探った。また、服飾専攻学生を抽出しその特徴についても検討した。

結果　因子分析の結果、主要因子として背広ｽﾀｲﾙのｲﾒｰｼﾞは 5因子（累積寄与率60.5%)、背広の着用態度は 4因子(54.8%) が抽出された。性格特性との関連では、着用態度の第 1因子（背広の嗜好性）において若干の差がみられた。また、全体平均と服飾専攻学生との差の統計的検定から、服飾専攻学生は背広でも個性、自己ｱﾋﾟｰﾙができ、社会に出てもある程度自由な服装を心掛けたいとし、そして服装は仕事の能力と関係があると考えていた。